

フレーベルの宗教と教育Ⅱ

—今日の教育諸問題との関わりで—

甲 斐 規 雄

今日の教育は、かつて我々が過ごした初等、中等そして高等教育に至る諸学校と全く次元の異なる教育機関に所属している実感を抱くのは著者だけであろうか。

かつて（2003年2月23日）、中央教育審議会は「教育振興基本計画」の答申素案を公にした。この基本計画の素案は、1998年小学校学習指導要領改訂に伴う保護者等の学力低下不安論争に対応し、1947年以来一度も改正されたことのない基本計画の策定であった。

その背景には、文部科学省の調査で「授業が分かる」と回答した小、中学生「学力向上」を重視する意向を公にしたものであった。

又一方で家庭では、家庭内暴力、子殺し・親殺し、家庭・生活の崩壊、虐待、保護者負担教育費、育児ノイローゼ等、学校では、いじめ、不登校、校内暴力、体罰、校則、不就学児童、障害児教育、夜間中学、帰国子女等、地域社会では、巨悪犯罪、無道徳・不道徳・神無き社会、教育力、倫理観不在のマスコミ、遊び不在、自殺、性非行、薬物乱用、情報開示、福祉行政破綻、改正教育法等々枚挙に暇がない。

ここで思うことは、これらの諸問題への対応にどのようなスタンスで望めばよいのか入り口がつかめない。従来の教育学の理論では到底解決への糸口、実態を把握することはできないようにも思われる。

このような諸問題について『明星大学教育学研究紀要』1986年創刊号から「ドイツ啓蒙思想の宗教性とF. Fröbel」、「新人文主義のギリシャへの回帰」、「F. フレーベルの教育史的位置の再考」、「プロティノスの二つの世界—フレーベル・Fの世界観研究の手懸かりとして—」等教育思想のテーマとして取り組んできた。そして今は、フレーベルの思想と宗教とは切り離すことのできない、むしろ宗教教育そのものではないかと実感し、前回から「フレーベルの宗教教育論」として方向づけることに辿り着いた。

前回フレーベル論文のテーマを「日本とドイツの宗教と教育—フレーベルの“普遍”をてがかりに—」でむしろ思想⁽¹⁾という一人一人の人間が生かされて生きているという思い、成長するということ、生きているということ、愛するということが、そして家族を持つということを原点に据えながら、それを実感しながらその諸問題について考えてみたいと思う。これは最も今日的なテーマではないかとさえ考えているからである。

しかしまた一方で教育とは、児童、生徒、学生等の将来の生活を保障するのは学力だけでなく広い教養、人間性という永遠のテーマを背負っていることを考慮に入れば、今日の教育力低下の問題は切実である。文部科学省は中央教育審議会に「義務教育包括見直し」を要請した。今日の学区制、Charter School等の規制緩和、また一方で文部科学省の方向を義務教育の再構成へと導いているのかもしれない。又一方で文部科学省は、2003～4年に

かけて小学校・中学校（国語，社会，算数・数学，理科）・高等学校（国語，数学，理科，英語）全国学力テストの分析結果を公表した。

しかし又一方で家庭学習の時間は低下しており，その分塾通いの低学年化が進行していることも事実である。

人間には本来「主体性」，「自由」が与えられている。その証拠に老若男女に関わらず，「楽しいこと」，「したいこと」をしているときは，明るく，生き生きしており，苦痛の溜息は聞こえない。むしろ「嬉しさ」，「楽しさ」に満ち溢れている。

フレーベルは、『人間の教育』の中で，そのことを次のように表現している。

Spielen, Spiel ist die höchste Stufe der Kindesentwicklung, der Menschenentwicklung dieser Zeit; denn es ist freitätige Darstellung des inneren, die Darstellung des Inneren aus Notwendigselbst sagt. Spiel ist das reinste geistigste Erzeugnis des Menschen auf dieser Stufe, und ist zugleich das Vorbild und Nachbild des gesamten Menschenlebens, des Inneren, geheimen Naturlebens im Menschen und in allen Dingen; es gebiert darum Freude, Freiheit, Zufriedenheit, Ruhe in sich und ausser sich, Frieden mit der Welt. Die Quellen alles Guten ruhen in ihm, gehen von ihm hervor ein Kind, welches tüchtig, selbsttätig still, ausdauernd, ausdauernd bis zur körperlichen Ermüdung spielt, wird gewiss auch Aufopferung befördernder Mensch. Ist nicht die schönste Erscheinung des Kinderlebens dieser Zeit das spielende Kind? — das in seinem völligen Aufgegangensein im Spiel eingeschlafene Kind? ⁽²⁾

「遊ぶこと，遊戯はこの時期における人間の発達，児童期の最高の段階である。

なぜなら，遊戯はその言葉が示すように児童が自分の内側を自らが自由に表現したもの，自分の内面の本質の必要と要求に応じて内面を表に現したものである。遊戯はこの時期における児童の最も純粋な精神的生産であり，同時に人間生活全体の模範でもある。従って遊戯はそれ自身喜びであり，自由であり，満足であり，平静であり，外界との平和であり，また人にもこのような感じを与えるものである。又遊戯はすべての善が出てくる源泉である。だから，身体が疲れるまで飽きずに落ち着いて根気強い優位の人となるのである。児童が熱心に遊びに没頭し，疲れて満足げに眠りこむ児童の様子は，この時期に於ける児童生活の最も美しい現象ではないだろうか。」⁽³⁾

この中には，決して子供のため息は聞こえてこない。ここには，力一杯に自発的に黙々と忍耐強く根気強く遊ぶ子供の姿が浮かび上がる。これは，フレーベルが幼稚園の創設者であるからと言って幼児にのみ見られる姿ではなく，本来学校，家庭等で学ぶ子どもたちに共通して見られるものなのではないだろうか。子供に関わる両親にしろ，教師にしろ全ての者が通過した成長のプロセスである。その時の行為は，決して強制される行為ではなく，「一生懸命」に黙々と忍耐強く，而も楽しそうに取り組んでいる。その姿をフレーベルは見いだしたのではないだろうか。学年が進むに従って，数学の練習問題集を一問一問乗り越えていく時，苦しさよりもむしろ楽しかったことを思い出す。そこには塾に行く姿もなく，ヒントを与え，回答に導いてくれる数学の得意な友人がいた。それほど数学に苦手意識が無くなったのも，精一杯努力し解決できた時の楽しさが身に付いたのではないだろうか。ご褒美をもらえるよりも，友人の援助があったにしろ自らが進んで努力して得た到

達成は今日でも思い出すことができる。そして友人とのやり取りも。

人間の能力は与えられたものではなく、その能力を精一杯自らが努力して初めて得られるものであることを学んだ。フレーベルは、それが真の学力であることを教えてくれる。中学校の理科の時間の天秤による測定の授業を思い出す。突然名前を呼ばれ「釣り合うにはどうするか？」と言われ、重心をずらした。先生はせせら笑った。これが理科の苦手意識に繋がった切っ掛けである。精一杯自らが努力して初めて得られる学力が、理科については無惨に崩壊した。国立大学入試で数学はクリアできたが、そのトラウマが精一杯努力して解決する力を削いでしまい、理科はクリアできなかった。重心とおもりとのバランスは相関関係にあるのに。長い間教師として、教師、学生の生きる姿勢が気になる。

学ぶことは楽しいことであり、その能力を発揮することができるのは喜ばしいことである。今日の教育の諸問題は、まえがきに述べたフレーベルの「人間は本来“主体性”“自由”が与えられている。その証拠に老若男女に関わらず、“楽しいこと”、“したいこと”をしているときは、明るく、生き生きしており、苦痛の溜息は聞こえない。むしろ“嬉しさ”、“楽しさ”が満ち溢れている」という雰囲気が確実に欠落している。自らをコントロールできず、先生や両親の教えをよく聞いた子供が、年頃になって荒れてくる確率が高い。子供には子供の成長過程があり、それは大人の成長過程とは異なる。それを「先生や両親の教えをよく聞いた」行為が、主体性を持つに至った時自己主張を始めるのは理解できる。逆に「先生や両親の教えをよく聞かなかった」子供が、主体性を持つに至るとコツコツと段階をクリアして立派な大人となっている事例は枚挙に暇がない。

それは、子供の成長発達はその中核に「自発性、主体性」があり、そのエネルギーに従い、その成長に相応しい行動をとることは当然である。その「自発性、主体性」は時には否定され、あるときには肯定される。フレーベルの一生には、荒ましい出来事に満ちあふれている。しかしフレーベルには常に「生かされて生きている」という実感に満ちあふれている。

前述のフレーベルの思想は、宗教とは切り離すことのできない、むしろ宗教教育そのものではないかとさえ実感している。「遊ぶこと、遊戯はこの時期における人間の発達、児童期の最高の段階である。なぜなら、遊戯はその言葉が示すように児童が自分の内側を自らが自由に表現したもの、自分の内面の本質の必要と要求に応じて内面を表に現したものである。遊戯はこの時期における児童の最も純粋な精神的生産であり、同時に人間生活全体の模範でもある。従って遊戯はそれ事態喜びであり、自由であり、満足であり、平静であり、外界との平和であり、また人にもこのような感じを与えるものである。又遊戯はすべての善が出てくる源泉でもある。だから、身体が疲れるまで飽きずに落ち着いて根気強い優位の人となる。児童が熱心に遊びに没頭し、疲れて満足げに眠りこむ児童の様子は、この時期に於ける児童生活の最も美しい現象ではないだろうか。」という前提は、自分自身を信じ、その時その時の自らの使命を理解できず、流されてそこに一定時間身を置いているように思う。

フレーベルは、「子供の生活は、自他又は自分と外界との区別を明らかにせず、家族や自然や神と一致結合して離れることのできない関係を持っているからである。たとえば、幼児は花そのものをそのものを楽しむのか、それとも、花を見る喜びを楽しむのであるのか、

または、花を母や父のところにもって来て示すときの喜びを楽しむのであるか、もしくは慈愛ある天父がこの花を自分達に与え給いしことをおぼろに感じて楽しむのであるか、幼児自らこれを知るわけもない誰がまた、幼児の感ずるこの豊かな喜びを分解しえようか⁽⁴⁾と述べる。「衣服のことは子供に対しても、又大人に対しても、決して小さな問題ではない。丁度キリスト教徒にとって“イエスの上衣に縫い目がなく、またその生涯や事業もそうであったように、自分の学説も一つの連続した全体である。”と言えるかどうかは決して小さな問題ではないと同様である。⁽⁵⁾ このように見てくると家庭、家族における父や母の自らの手による教育は子どもの持って生まれた能力や素質を覚醒、発達させ又勇気付ける。その行為は子どもの四肢や諸機関を訓練することになるが、母親はその行為をむしろ本能的に行っている。しかしその本能には自ずから限界がある。そのため意識的に絶えず成長してゆく子どもに対して「人間の連続的な発達を目指しながら、意識して子どもの心と深く結合しつつこれを実行するのでなければならない。」⁽⁶⁾ 又子どもが自ら見たり、触れたりすることのできない機能（鼻、耳、舌、歯等）については、母親の指で遊びながらその機能や存在を知らせる積極的な行為を欠かすことはできない。その結果「母親のこのような行為によって当初から指導、刺激されていれば、子どもはそれがたとえその形を見ることができなくとも、その存在を知ることができるようになる。」⁽⁷⁾ これはやがて「僕の腕は僕ではない、僕の耳も僕ではない。僕の身体から手や足や、耳や目を取り去っても僕には少しも変わりはない。それでは一体僕は本当は何だろうか。僕が自ら『僕』と呼んでいるのは一体誰だろう、何であろう」⁽⁷⁾ このようにして母親は注意深く、子どもと楽しく遊びながらその範囲を広げてゆく。「これが人間の神的で自然の本質にかなった発達の出発点である。」しかし現実にはこの教育の出発点を無視して、母の才智に頼ってしまう。「そこには自然の母の働く余地もなく、神の力の現れる場所もない。」人間は生かされて生きていることの実感を子どもは持つことなく、感謝することもなく子ども部屋から、社会へ出てゆく。「子どものあるべき要素は全て子どもの中に含まれている。」⁽⁸⁾ と述べるフレーベルは「さあ、再びあの美しい家庭に立ち戻ろう（中略）母親が我が子の教育を他人に委託することのない美しい家庭に立ち戻ろう」と「神によって生かされて生きていること」を感謝しながら「母親の愛、包容のある母の心」に従うことを提案する。母親の神的爱情のこもった行為は、やがて子どもをして先天的な本能は、「神の創造物である万物の中に神を見いだそうと努めるようになる。（中略）神はそれに対して子どもに悟性、理性、言語を与えている。」⁽⁹⁾

この親切的な母親（マリア）と思慮深い父親（キリスト）は、気づかずして光と影、昼と夜のような神の思いに従った精神と身体が形成されてゆく。

かくしてフレーベルが「教育の目的とは、よく天職に忠実な、純粹無垢な、従って神聖なる生活を実現することにある」Der Zweck der Erziehung ist Darstellung eines berufstreuen, reinen, unverletzten und darum heiligen Lebens. という『人間の教育』⁽¹⁰⁾の書き出しは、「幼児期は生きるために生きること、内界を外界に表現する時期に少年として神的爱情に見守られて巣立ってゆく。（中略）学校の純真な精神は、イエスの精神、神の霊と同じ（中略）ルターの言った言葉がある。“断食して身体の方面から心の準備をすることは結構な外面的訓練には違いない、けれども、真に価値があり、真に準備のできた人と

いうのは、信仰を持ち、よく他に信頼することのできる人をいうのである（中略）子どもはこのような信仰、信心、期待、予想を持って学校に入ってくるから一切の教育ができる”」で結ばれている。⁽¹⁰⁾

注

- (1) 世の中の変化とは無関係に生涯変わらず、その人間の一生全てを貫くこと
- (2) .Friedrich Fröbel, Ausgewählte Schriften, Herausgegeben von Erika Hoffmann Zweiter Band "Die Menschen Erziehung" Verlag Helmut Kupper Vormalis Georg Bondi S.38
- (3) ibid., (S.37)
- (4) ibid., (S.39)
- (5) ibid., (S.39)
- (6) ibid., (S.39)
- (7) ibid., (S.41)
- (8) ibid., (S.45)
- (9) ibid., (S. 8)
- (10) ibid., (S.77)